
練習作

そうめん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

練習作

【コード】

N9010Z

【作者名】

そつめん

【あらすじ】

転生ものです

初めての投稿です。亀更新になるかも知れません。

プロローグ？（前書き）

初投稿作です。よろしくお願ひします

プロローグ？

「正ちゃん」

図書館の読書スペースで本を読んでいる時に

皆本 正一は、名前を呼ばれた。

振り返らなくても名前を呼んだ相手はわかっている。

正一を「正ちゃん」なんて呼ぶのは今のところ家族しか居ない。

声の幼さを聞けば思いつくのは一人しか居ない

いつの間にか横に並んで座っている 皆本 光一 を見る。

眼鏡を除けばそっくりな光一、鏡でも見てる気分になるほどそっくりだ。

双子だから当然だと言えば当然かも知れない

最初の頃は違和感があったが八年も一緒だと、これが普通だと思えるようになる

「正ちゃん、お母さんがそろそろ帰ろうって・・・」

光一の話聞きながら背後から腕が伸びてきて抱きつかれる

「二人共借りる本は決まったかしら？そろそろ帰るわよ」

お母さんが笑顔で話してくるが目が笑っていない

やばい 機嫌が悪いようだ

借りるなら本は一人三冊までと言われどれを借りるか悩んでいる間に

いつの間にか読書に夢中になってしまい「まだ決まってません」とはさすがに言える雰囲気では無い

目の前のテーブルに置いてある十冊程の本の中から適当に三冊を選びお母さんに渡す

「お母さん借りない本はあった場所に戻すからちょっと待っていて」
急いで残りの本をあった場所に戻しに行く

八歳の子供には本一冊が重く大きいが何度か往復する事で全部元の場所に戻して、ほっと一息をつき

横に居る光一の顔を見る

「ごめんね。正ちゃん言うのが遅くて・・・」

私は慌てて大きく首を横に振り

「本に夢中になった僕が悪いんだから、お兄ちゃんは気にしなくていいよ」

光一は「うん」と頷きながら、本当に？と尋ねるように私の顔をのぞきこんだ

私は、受付で本を借りているお母さんの後姿を見つめて黙っていた
光一に対して怒っているわけではなかった

『昔の私』が小さい時に夢見た家族象を思い出し、今の私が過ごしている今がその家族像だと気づき今が幸せのように感じた

しかし、『昔の私』を光一にむかって言葉にする気はない

誰に対しても『昔の私』のことを言葉にして語りたいとは思わない
だから口をとじ黙って、お母さんの後姿を見ていた

第一話？（前書き）

こっちがプロローグぽいような・・・

第一話？

私、杉本 晴香 39歳 独身

恋人の存在や、結婚の予定は無し

高校を卒業して中小企業の事務職に運良く就職し仕事一筋で働き続け
気がつけば社内でお局様と影で言われ、新入社員の教育担当にもな
っている

新入社員が入社してきて間もないこの時期は、新人教育と自分が受
け持つ仕事の処理などで毎日が忙しく風邪を引いても休むこともで
きそうに無い
いたって普通の一般人だったと思う

気づいたらこの世界に生まれ、赤ん坊になっていた。

最初はパニックになり、起きようと思っても起きれない。

声を出しても「おぎやあゝゝ」しか言えない

手足をバタバタさせていたら、人が近づいてくるのを感じ

見ようと目を開けたけど何か膜でもかかっているのか？

ぼんやりとしか目で見る事ができない何人か私の前にやってきた

家族でも友人とも違う聞き覚えの無い声を聞き

またパニックになったけど、一人が私の体を触ってなにやら話し合
っていた。

やっとの思い出聞き取れた会話の内容からして

超未熟児が生まれてある程度の体重になるまで命が危ないらしい

何だか、ドキュメンタリーや昼ドラみたいな話だな、と感じながら

私は再び眠りました

会話を聞いてから数日後自分の体の中に【何か？】を感じた

その【何か？】は今の自分にとっては当たり前前のもので『昔の私』
にとっては知らないものだった

ただその【何か？】が無ければ自分は死んでしまつと本能ではわかっていた

『昔の私』にとっては、【何か？】に凄く違和感を感じた
その時の私は、その違和感を無視することができず、少しだけ【何か？】を抑えることにした

押さえ込んだ瞬間息苦しさと体中から伝わってくる痛み
周囲からいくつもの機械音が一齐に高く鳴り響く

近くに人が集まり騒がしく緊迫した感じで飛び交う声
誰かが私に触り何かを当てたと思つた瞬間に電気の衝撃
驚いた私は【何か？】を抑えることを止めた

鳴り響いていた機械音が静まり
すると近くに集まつた人達の安堵する声を聞けばイヤでも理解できた
会話の赤ん坊は私だつたのだと・・・

けれど自分がどこにいるのかよくわからなかつた
周囲から聞こえてくる会話が日本語だから最初は日本だと思つていた
当時自分が一番気にしていたのは『元の私がどうなつたのか？』
だつた

生きてるのか？死んでるのか？。多分死んでるだろうが
風邪をこじらせて死んだのか？なんて考えたり
自分の死因がわからなかつたのが非常に気持ち悪かつた

一カ月後、目がある程度見えるようになる
日本だと思つていたのに色とりどりのカラフルな頭髪の人達見て
ここは『昔の私』が知っている世界じゃないと最初に理解した

ここはどこなんだらうと悩んだが、
自分が「絶対可憐チルドレン」の世界に転生したつてわかつたのは、
三歳くらいだと覚えている

自分の中にある【何か？】が超能力だと言つものに気づき

双子の兄の名前が光一で、定期検査のESP検査

ESP検査をする機関の名前がBABELとくれば漫画を読んだことが
ある人なら解ると思う

将来起こるノーマルとエスパーの争いと思うとため息が出る

原作者の他の漫画を思い出して、最後はハッピーエンド？だから大
丈夫だろうと気持ち切り替えて生きていく事にした

ただ何でTS転生してしまったんだろう？と思うがくよくよしてい
ても仕方ない

第一話？（後書き）

書き足りない文章が多すぎだあ・・・

第二話？

皆本正一

晩御飯を食べ終えてリビングで図書館から借りてきた本をソファーに座って読んでいた

視線を感じる

借りてきた本から視線を横にずらすと横に光一が居た

「正ちゃん凄いな！そんな難しい本が読めるなんて！」

「そんなに難しくないよ？超能力とDNAがどのように関係するのか？って内容の本だし、お兄ちゃんが読む本の方が難しいと思うけど……」

「簡単だよ？量子力学についての内容が書かれてるだけだし」

「……それ高校か大学で学ぶ物だよ」

私は読んでいた本を閉じて、光一の横に移動して読んでいる本を覗いた

エネルギー公式の数式が開かれたページ一杯に書かれている

普通の大人でも、この公式を理解するには専門の知識が最低でも大学の知識が必要になるくらいに難しいと思うんだけど

かるく数式見たただけだから確信できないけど、相対論を考えた数式かな？

原作で光一が小学生の時に特別教育プログラムを進められる理由が理解できそうだな

光一と双子だけあって、この体の暗記力には驚かされたものだ

一度読んだら一文字も間違えずに覚えていて内容も理解してしまう

まるでゲームでもしているような感覚で知識が蓄えられていくのだ
『昔の私』の記憶で期末テストや受験などで苦戦しながらも一生懸命に勉強していたのが良い思い出だ
今は逆に知らないことを知るのが楽しくなっている
気がつけば沢山の知識を蓄えてしまった
ちよつと調子に乗りすぎたのかもしれない

皆本 光一

正一は僕の読んでいる本を見た後、僕の顔を見て難しい顔をしている
世話好きで優しい性格だけど無表情なので初対面の人によく勘違い
される

普段無表情で泣きも笑いもほとんどしない僕の弟
お母さん達が心配して一度病院で相談した事もあるらしい

僕の借りてきた本はそんなに難しかったのだろうか？
弟が顔に表情を出すなんて珍しい

「そんなに難しいかな？」

「・・・難しいと思う」

「どこかわからない所あるの？教えるよ？」

僕が言うと、正一は目をキラキラ輝かせた
本を数ページ捲り、一つの項目のところを指差して

「お兄ちゃん、ここ教えて欲しいんだけど・・・」

困った様な顔をしながら正一は僕に聞いてくる

今日の正一は表情がよく変わる
本当に珍しい

正面の少し先に目をやると、お母さんとおばあちゃんがカメラを持つて何やら騒いでいる

あれで正一を撮るつもりなのかな？

困った顔をした正一の顔は記念写真になるかも知れない
だけど、カメラで撮られていると知られたら無表情に戻るだろうから
気づかれないように、こつちに気を向かせないと責任重大だな・・・

お父さん

「おーとうーさーん」

「どうした？」と言いながらお母さんに呼ばれて見えるところまで
来るとソファアーの上で正一が寝ていた

「お父さん、正ちゃんが寝ちゃったから部屋まで運んでくれないかしら？」

「それは良いが？珍しいな？正一がこんな所で寝るなんて」

「更に珍しいことに、今日は正ちゃんの表情をカメラに収めたわよ」

「それは凄い記念写真になるな」

「正ちゃんを部屋まで運んでくれた後で見せますよ」

「それは楽しみだ」と言いながら正一を抱き上げた

正一の部屋へ先導する光一の後ろを正一を抱きながら歩いている

正一の顔を見ると穏やかな顔をして寝ている、抱き上げて少し前抱いたときより重くなった息子

ここまで無事に大きく育っていることに嬉しさを感じる

体のさまざまな部分が未発達だったために生まれてすぐに新生児特定集中治療室（NICU）に運ばれ

私が仕事場から駆けつけたときには正一だけは集中治療室に居るので見ることはできず

妻と一緒に初めて触り抱いたのが数日過ぎてからだった

妻と光一が退院した後、正一が退院できたのは更に一年後だった

普段は無表情だがただ生きていてくれることだけで嬉しい

退院するときに担当医から合併症の心配を示唆されたが

今は元気に育っていつてくれる事がこんなに嬉しい事かと改めて思う

「お父さん？」

「ああ・・・すまんすまん」

光一が不思議そうな顔をして私の顔を見てくる

考え事をしながら歩いていたら、正一のベットの前に居た

正一をベットに寝かせながら、お母さんが後で記念写真を見せてくれると言ってたな

記念写真がどんな表情で写っているのか楽しみだ

第二話？（後書き）

感情を文章にするって難しいですね

第三話？

皆本 正一

いつも通りに学校に行って、いつも通りに今日も私は友達の家に来ています

「こら！真面目にジャガイモの皮を剥け！」

調味料が入った小瓶が目の前にいる青い頭髪をした少年の頭に当たる
小気味よいコンという音が聞こえた
少年は痛かったのか？目を少し潤わせながら私の顔を睨む

「いてえ〜！ちゃんと皮剥いてるじゃねえか！」

「芽もちゃんと取れと何度言えばわかるんだよー」

「だから！ちゃんと剥いてるだろうが！！芽なんてあっても煮て食べばたいして変わらないじゃないか！！！」

「口答えするな！」

今度は近くにあったラップが浮いて少年に目掛けて飛んでいく
ゴンとさっきよりも重い音が聞こえた

「~~~~~！！！！！」

さっきよりも痛かったのだろう

今度は両手で当たった箇所を手を当てて半泣きしている

「手を休めるなよ！早く料理作ってお前の勉強も見るんだから」

「今日も勉強かよ！！！」

「はいはい、わかったから手を動かせ」

「なんでこうなった？」等と友達の 吉田 実 がブツブツ呟きながら言われたとおりにジャガイモの皮を剥いている

三ヶ月前

吉田 実

ここは何かを建設する予定だったのか放置された工事現場だ
人気は無いが僕はここを秘密基地に使っている

今僕の前では学校で無表情が理由で鉄化面とあだ名で呼ばれている
同じクラスの 皆本 正一 がいる

向こうは僕には気づいていないようだ
工事で使う予定だった機材や道具を見ている

何をしているんだろう？

僕は不思議に思いながら黙ってみていた
すると突然正一の前にあった工事車両の一台が浮き始めた
驚いて僕は気づかないうちに声を絞り出していた

「ひい！ー！」

正一は僕の声に気づいたんだと思う
こちらに顔を向けて目が合った

僕はすぐに逃げようと思立とうとしたら腰が抜けたのか立てなくなっていた

視線の先では正一が僕に向かって歩いてくる
一歩一歩僕に近づいてくる

腰を抜かして動けず、さっきの光景を思い出すと怖くなって目を瞑

った

足音は僕の前で止まった
でも怖くて目を開けられない
何が怖いのか？と聞かれれば答えられないけれど怖いものは怖い
どれくらい立ったのだろう
最初に声をかけてきたのは正一だった

「あの・・・同じクラスの 吉田 実 君だたよね？」

恐る恐る目を開けると目の前に正一の顔が見えた
僕の視線に合わせるように方膝を付いている
もっと驚いたのが、いつもは無表情なのに不安そうな顔をしている
まだ怖くてうまく喋る自信がなかった僕は勢いよく頷いた

「あのさー・・・さっき見たことみんなに内緒にしてくれない
かな？」

僕は最初、言葉の内容が理解できなかった
さっき見たこととは車両が浮いていた事だ
何で黙っている必要があるのか解らなかった
僕が返事しないことに不安になったのか
正一は不安そうな顔になりながら続けて言ってきた

「その・・・さっき車両が浮いていたでしょ？あれ超能力で浮か
せたんだ」

なるほど！

あれが超能力と言うものなんだ
初めて見てビックリしたけど凄いな超能力

「超能力は内緒にしていたいんだ。お母さんやお父さんが知ったら問題になって離婚とかになったらイヤだし……」

「り……離婚!？」

「……うん」

僕は離婚って言葉を聞いて慌ててしまった

だって！僕の家も一年前に離婚して母子家庭になっていたからだ

お父さんはお母さんとは違う人が好きになって出て行った と後で

お母さんが言っていた

僕は大きく深呼吸して正一の顔を見た

「どうして内緒にするのか教えて？後は何でお母さんが離婚しちゃうと思う理由も？」

第四話

吉田 実

お風呂に入りながら僕は話の内容を思い出していた

今の社会では超能力者は差別されている

超能力を持っただけで化物扱いされたりする

その差別が家族にまで及ぶ場合もある

力の強い能力者になれば

その力が恐ろしくなると家族からも差別される場合もある

親は子供に能力があるとわかるとそれが原因で捨てたり離婚したりなど

家庭が壊れることが多いらしい

自分で話す内容に怯えている様子で語る正一の姿の方が記憶に残っている

超能力って持ってしまつてしまうと大変だな・・・

普段無表情なのも能力が暴走しないように抑える為なんて僕には耐えられないしな

あの時超能力の事教えてもらつたまでは化物でも見るような感じで正一見ていた

明日正一に会つたら謝ろう

次の日

皆本 正一

教室に入ると吉田実と視線が合った
昨日のことを思い出すと教室に居辛い気持ちになってくる
内緒にしてくれると約束はしれくれたけど守ってくれるとは限らない
もしバラされたらどうしよう
そんな事を考えると不安になってくる

黒板に置いてある黒板消しがカタカタと鳴る

いけない！感情を抑えないと能力を無意識に使っているようだ
冷静に冷静に・・・
超能力が強くなってきているのか
少しでも動揺したら能力が勝手に発動してる・・・
今のところESP検査には幸い引っかかっていないけど
時間の問題かも知れない

自分の席にランドセルを置いて教科書を机の引き出しにしまっ
ランドセルをロッカーに置きに行こうと持ち上げようとした時に

「おはよう皆本」

「・・・おはよう吉田君」

「あ・・・あのさあ・・・」

吉田は目を泳がし、人差し指で頬をかきながら「昨日はごめんな
」
「へ？」

私は予想外の言葉を言われて対応できなくなっていた
なんでいきなり謝ってきたのか理解できなかった

「その・・・化物でも見たような目で見ちゃったしさあ・・・」

「ああ……気にしてないよ……多分それが普通の反応だと
思うし」

吉田はなぜか悲しい顔をして僕を見てくる
何か気に障るような事を言ったのだろうか？

「お詫びの印に今日学校が終わって暇だったら僕の家で遊ばない？
新作のゲームがあるんだ」

「え？ゲーム？」

「うん！ドムクエだよ！！」

ああ〜ドムクエねえ……

てか、一文字違えば著作権侵害で訴えられないと思ってるのか……
アメリカとか……一文字変えればいいものかな？この世界は
……

どっちにしろ、某ゲームでも余り興味ないんだけど

今も『昔の私』もゲームには余り興味出無いんだよね

だけど、断ったら泣くよね。この顔してる人は……

「ドムクエか！凄いな！遊びに行ってもいいの？」

「うん！一緒に遊ぼう！！」

僕は心にも思っていない事を言って放課後、吉田の家に遊びに行く約
束をした

第四話（後書き）

書き方が雑になってきた気がする

第五話

皆本 正一

今僕の目の前には腐海が広がっている

「なに？この腐海は？」

「え？ちよつと散らかってるだけだよ！！腐海じゃないよ！！」

僕の横で何やら必死に抵抗している吉田が居る

抵抗していてもこの腐海が無くなる訳ではない

よく見れば吉田の服も綺麗に洗濯されている様子もない

育児放棄か？酷い親もいるものだ

吉田は諦めたような顔をして事情を説明しだした

「お母さんと二人暮らしで、お母さん仕事が忙しくて帰りが遅いんだ。土日も仕事で家に居ないんだ」

ふむ、育児放棄している訳ではなくて家事に手が回らないのか・・・

よくある最悪のパターンに行くケースの家庭環境のような・・・

「掃除だけでも手伝ってあげたら？吉田君にもできると思うけど？」

「僕、学校でしか掃除したことないから、やり方わからないよ」

ううう・・・何？このダメツプりの返事は！！

子供は親を選べないけど

今ある環境を自分で開拓する気持ちにならないのか

ダメだ！目の前の腐海とさっきの返事でもう耐えられない！

「吉田君！箒と雑巾どこにある！後ゴミ袋も！……！」

「え？ゲームしないの!？」

私は玄関の近くに置いてある回覧板を持ち、それで吉田の頭を叩いた

「~~~~~!!!」

「馬鹿もん！！自分の家が散らかっていたら少しは気にしろ!!」

吉田は一瞬怒った顔をしたが私の顔を見ると頬を引きつらせながら家の中から掃除道具を持ってきた私は道具を引っ手繰ると

「ほら！お前もゴミ袋持つ！」

「箒の使い方も知らんのか!!!」

「こつこつ場所は雑巾で拭くの！面倒くさそうに箒で掃くな!!」

ふと気づけば吉田は私の顔を恐る恐る見ながら一緒に掃除をしているいけない『昔の私』の時の悪い癖が出てしまったようだ

『昔の私』は仕事の出来ない新人を見ると我を忘れて教育をしていた時があった

後日、教育指導を受けた新人達は影で私のことを 修羅のお局様と呼ぶようになっていた

一緒に掃除をする吉田の顔を見ると所々赤くなっている箇所があるどこかにぶつけたのだろうか？

そう言えば『昔の私』が我を忘れて新人達を教育した後、同じように所々顔を赤くしていたな・・・
深く考えないようにしよう

ちよつと小腹が空いてきたな

そう言えば吉田の母は仕事で帰りが遅いとか言っていたな
晩御飯とかどうしてるんだらう？

「吉田君はご飯とかどうしてるの？」

「え？ご飯はお母さんの帰りが遅いときは、そのテーブルにお金が置いてあるから

それを使ってカップ麺やコンビニのお弁当で済ましてるよ」

話を聞いて私は硬直してしまった

横では吉田が心配そうに見てくる

ダメじゃん！！かなりヤバイよ！！何！？この昼ドラとかに出てき
そんな家庭は！！

これは吉田に家事を教えないと将来が心配になってきた

私は決意して吉田の目を見て言った

「今日は僕がご飯作ってあげるよ。ただし明日からは吉田君に料理
と掃除と洗濯後、勉強も教えてあげる」

「えーーーー！！！！」

吉田はイヤそんな顔をしながら抗議の声を上げてる

「何か文句ある？」

「いえ・・・なにもないです」

現在

吉田 実

今僕の横では正一が教科書を丸めて片手で持っている

この問題集がうまくできなかつたら

その教科書で頭を叩かれるか思うと問題を解くスピードが上がっている

最初に正一が我が家に来たことを思い出すと今ではいい思い出だ

今では家の中は綺麗になつて美味しいご飯も正一が居なくても数種類自分で作れるようになった

お母さんからは「実ちゃんがこんなに手伝ってくれるなんて助かるわ」と喜ばれて僕も嬉しくなってしまう

学校は勉強に遅れていて授業を受けていても何を教えているのか理解できていなかつたけれど

今では先生の言ってる事が解って毎日学校に行くのが楽しくてたまらない

たった三ヶ月

この時間だけで僕の生活はとても良い方に大分変わった

横では怖い顔している正一

超能力は僕と正一の二人だけの秘密だ

僕と二人で居るときは超能力の事を知ってるからと無理に抑えなくていいのか表情が豊だ

何だかんだで正一とは家の外でも一緒に行動する事が多くなったと
思う

正一は僕にとってはちょっと怖い救世主だ

バシ

「いてえっ~~~~~」

「ほら！考え事しないでさっさと答えを解く」

「わかってるから殴るなよ〜」

「うるさい〜」

バシ

「~~~~~!!!」

第六話

皆本 正一

私は今の生活が凄く幸せに感じて、これからも続くものだと思っていました

そう……私は原作を読んで知っていたのに
アイツがそろそろ我が家にやってくる時期が近いとなぜ覚えていなかったのでしょうか？

アイツは……前触れもなく突然我が家にやってきた
そして私の大切なものを侵略していったのです

あれから数ヶ月たち、私は九歳になりました

吉田君は『昔の私』の経験を元に家事等を教えて
今では最低限の家事は一人で出来るようになり
学校の勉強にも学力が追いついてきて

今では放課後、教室と一緒に学習するだけで足りるようになりました
今日も放課後一緒に学習をして、その後は一緒に遊び家に帰ってきました
ました

いつも通りの時間に玄関を開けて家に入ります

「ただいま」

いつも通りだとリビングの方からお母さん達が「おかえりなさい」

て返事がくるのに今日は何の反応もありません
逆にリビングの方から楽しげなお母さん達の声が聞こえてきます
私は どうしたんだろう？ と不思議に思いながら玄関からリビングに向けて歩き出しました
リビングに通じるドアに手を掛け開けた先にアイツは居ました

犬種 ミニチュアダックスフンド 生後数ヶ月 名前トルテ

アイツはリビングの真ん中に陣取ってお兄ちゃんとお母さんを独り占めにしていました
その後どうやってその日を過ごしたのか記憶がありません

お父さん

「やれやれ、やっと静かになったか」

私はリビングでソファーに座り一騒動が終わったと安堵している
横では妻が私に一息つくためにお茶をだしてくれる

「おつかれさまでした。お父さん」

「いやゝ参ったよ・・・家に入ったらいきなり正一に抱きつかれた
と思ったら泣いてるからな」

横では妻やおばあちゃんが人事のように笑っている

まったく人事だと思っているようだが担当になったものとしては苦
労させられたものだ

今日はたまたま仕事が定時に終わり、いつもより早めに帰宅が出来た家に入るなり、突然正一に抱きつかれて顔を見たら泣いているものだから

珍しく光一と喧嘩でもしたのかと思いながら

足にしがみつく正一を引きずるようにリビングに向かうと子犬が居た妻達に聞けば正一は子犬に妻達を取られたとかで子犬に嫉妬して泣いたという

おかげで早く帰れたのに正一が寝るまで慰めたり諭したりの一騒動だ結局最後まで子犬に嫉妬して光一と同じベットで一匹と二人は寝ている

「まさか犬一匹であんなになるとはな……」

「ええ……私も正一があんなに取り乱すとは思いませんでしたわ」

また思い出したのだろう妻の顔から笑みがこぼれる

「どうするんだ……あんなのが連日続いたら俺がもたないぞ？」

「大丈夫ですよお父さん。最初だけですから」

「本当に大丈夫か？」

「一ヶ月もすれば逆に光ちゃんと正ちゃんて犬の取り合いになりますよ」

「おいおい……そのどこが大丈夫なんだよ」

「次回も頑張ってくださいね。お父さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9010z/>

練習作

2012年1月6日18時49分発行